

どりゅうざん

へいちょうざん

土竜山事件と平頂山事件

土竜山事件とは

満州開拓団の第1次弥栄(いやさか)、第2次千振(ちふり)の入植用地買い上げ交渉が、関東軍と原住民との間に行われましたが、その方法に不満を持った原住民たちが、弥栄・千振両開拓地を奪い返そうと、1934年(昭和9)2月下旬頃から、依蘭(いらん)県第3区八虎力屯の保長であった謝文東(しゃぶんとう)を指導者として土竜山一帯の農民が結束し、3月8日には2000人余の農民が武装暴動を起こしました。翌9日には日本警察署を襲撃して占領し、十数人の警官を射殺しました。

この土竜山事件を契機に、蜂起した謝文東や大刀会(たいとうかい)紅槍会(こうそうかい)の農民自衛団があいついで永豊鎮(えいほうちん)・湖南營(こなんえい)の入植地をおそい、日本移民団に重大な損害をあたえました。5月1日には、千振開拓団を約3000人の原住民が包囲しました。

5月末、関東軍は佳木から軍隊を増強して謝文東の勢力への徹底した報復のせん滅攻撃に出ました。わずか10時間で非戦闘員440人余を殺害し、200軒余の家を焼き、ある村では全住民が殺されました。

開拓団が「匪賊」と恐れた抗日義勇軍団



抗日ゲリラの襲撃に備える女性たち

「満州」東部・牡丹江上流の敦化の武装移民村、開拓のかたわら、女性も射撃訓練を怠らなかった。

(写真は『写真記録日中戦争』2巻ほるぶ出版より)



平頂山事件とは

累々と並ぶ白骨の山



(写真は『平頂山事件とは何だったのか』高文研より)

「満州国」建国に対する抗日闘争がひろがり、独立守備隊(関東軍の前身)が厳重警備態勢に当たっていたにもかかわらず、1932年(昭和7)9月15日深夜から翌16日未明にかけて、2000人余りの大刀会(抗日集団)による撫順炭鉱攻撃事件が発生しました。この攻撃で日本側は死者5人、負傷者7人をだしました。面目丸潰れの日本守備隊は、報復としてその後、ゲリラの足場になったとみられる撫順近郊の平頂山集落を包囲し、そして全集落民を近くの採砂場のかけ下に追い込み、大人も子どもも母親も全員を機関銃で射殺しました。機銃掃射を終えると日本兵が累々と重なりあって倒れている住民の上に隊列を組んで歩きながら、息のあるものを見つけると容赦なく銃剣で突き刺しました。死者は2300人から2500人と推定されます。さらに平頂山集落に火を放ち、集落そのものを完全に消してしまいました。翌9月17日日本兵は虐殺現場に残された死体の山にガソリンを撒き、これを焼却しました。さらにその数日後には、ダイナマイトで崖を崩し、土砂で死体の山を覆い隠しました。

この虐殺事件から奇跡的に生還した莫徳勝、楊宝山、方素栄さんの3人による戦争被害賠償請求訴訟が1996年東京地方裁判所に提訴され、10年におよぶ裁判闘争がたたかわれ、2006年5月最高裁上告棄却で幕を閉じましたが、裁判で虐殺事件の真相を公にした意義は大きかったといえます。その活動はさらに継続されています。(平頂山事件訴訟弁護団編著『平頂山事件とは何だったのか』高文研より)